

国 語

(六〇分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「一」
いわゆる「世間の人」として、何がわからないのか、それがわからなくなっている自分に気がついたのです。いわば「無知の知」を知ったのです。「無知の知」とは、「あ」^①という意味です。キチョウな体験でした。

わかりやすい説明の準備は、相手が何を知らないか、それを知ることから始まる。い

この体験は、その後、「こどもニュース」でも活かることになりました。出演者の子どもたちやお母さん役が「わからない」と言うたびに、自分の「無知」を思い知ったからです。

あなたも仕事のうえで、専門用語を無意識に使っていませんか。相手が大人ですと、わからなくてもわかったふりをして聞いていることがあるので、自分では「相手に理解してもらっている」と勝手に思い込んで説明をしていたが実はまったく伝わっていない、ということもあるものです。

かつて、ある農村で学者の講演会があったときのこと。講演会が終わって帰る道すがら、農家の人たちが、「あの先生は、ドジョウが好きなんだなあ」「ああ、ドジョウが大切って、ドジョウの話ばかりしていたからな」と感想を言い合っていました。学者先生は、「農業では土壌が大切」という話をしたつもりだったのですが、聴衆は「泥鰌」のことだと思っていた、という話です。

当時は夕方六時から一〇分間の全国ニュースを読んでいたこともあります。放送前に下読みをしていると、ある経済ニュースが、あまりに専門的でわかりにくかったことがありました。私は「視聴者の代表」。これをそのまま読んでも視聴者にはわかりません。「こんな原稿わかんないですよ」と言ったら、経済部のデスクは、こう言い放ちました。

「わからないのはお前がバカだからだ」

これは衝撃的でした。たしかに私はバカかもしれないけど、わからないまま読んだって、視聴者がわかるわけではないでしょう。「お前がバカだからわかんないだけだ。いいからこれを読め」では、視聴者にとって、^②わかりやすいニュースにはなりません。

こういうこと、あなたの職場でもありませんか。あなたの書いた文章を、若い社員が、「これどういうことですか?」と聞いてきたとき、「わからないのは、お前がバカだからだ」と思っていますか。経験の浅い社員にもわかるような原稿を書けなかった自分が「バカ」なのかもしれないのに。

②
ホウドウの世界では、視聴者や読者よりも、取材先のほうを向いて原稿を書いている記者がいるものです。わかりやすい原稿を書く、取材先にバカにされそうな気がして、専門用語を駆使して難解な原稿を書いてしまいます。「私はよく知っているんですよ」と見せびらかすような原稿を書いてしまうのですね。

こんなこともありました。政治のニュースについて、政治部のデスクではなく、ニュースを整理する立場のデスクが、「この原稿を下読みして」と私に持ってきました。読んでみると、視聴者にはとても理解できないことばかり。思わず私は、「デスクは、この原稿が理解できるのですか?」と問い詰めてしまいました。すると、このデスク、「うーん、オレもよく理解できないんだ」。

私は怒りましたね。「自分が理解できない原稿を読ませるんですか。あなたが理解できるように原稿を直してから持ってきたらどうですか」と。

このデスクは、政治部出身ではなかったため、政治部に遠慮があったのでしょう。政治部から出稿された原稿を、そのまま放送しようとしていたのです。

政治部の記者は、取材先の政治家に知らせる原稿を書く。経済部の記者は、中央^③シヨウチョウの役人や財界人が納得するような文章を書く。社会部の記者は、警察官や検察官に認めてもらえるようなリポートをする。

そんなことが日常茶飯事でした。自分は、誰に向かって伝えているのか。この自問自答から、わかりやすい説明は生まれてきます。「この原稿はわからない。むずかしすぎる」

ニュースセンターで、いつも私は文句を言っていました。もしかすると、その結果、「こどもニュース」に起用されることになったのかもしれない。

一九九四年から、今度は、子ども向け新番組「週刊こどもニュース」のお父さん役を^④ツトめることになりました。それまでも、自分なりにニュース原稿をかみくだく努力はしてきたものの、^③「こどもニュース」の現場では、さらに衝撃を受けました。

「政府は……」と言おうものなら、「政府って何?」。

「官房長官は……」と言えば、「官房長官って何?」。

自分の「ニュースの常識」を、^⑤コンテイから揺るがされました。政府にしても官房長官にしても、みんながわかっていることを

国 語

前提にしてニュースはつくられています。それを、「政府」や「官房長官」から説明しなければならぬ。ということは、普通のニュースの難解な表現を少し言い換えるだけで成り立つものではなかったのです。私にとって、^(注5)驚天動地の経験でした。

自分がそのことを本当によく知っていないと、わかりやすく説明できないのです。なまじ中途半端に知っているのと、「あれも言わなければならぬ」、この要素を落とすと正確ではない」と不安になり、ややこしい説明になってしまいがちです。出来事の全体像が理解できていれば、それぞれの要素の価値が評価できますから、大胆に切り落とすことも可能になるのです。

それに気づいたのは、イラク政治の専門家である酒井啓子さん(当時はアジア経済研究所の所属、現在は東京外国語大学大学院教授)に、「こどもニュース」のゲストとして解説していただいたときのことです。

酒井さんは、イスラム教やイラクという国について、本当にざっくりと説明してください。私も、イスラム教やイラクについては、それなりに理解していたつもりですが、酒井さんのようにざっくりと説明するなんて、とても恐くてできませんでした。「え、そんな説明でいいの?」と思うぐらい、子どもにもわかりやすい説明でした。

本当によく理解している人は、こんなふうになぐりとひと言で説明できるのだなと思いました。

それは、大胆に省略できるからです。何を話すかではなくて、何を割愛するか、ということも大事なことです。全体像が頭に入っていますから、落とすべき要素を選択できるのです。

(池上彰『わかりやすく伝える技術』による)

○(注1)「こどもニュース」……難しいニュースを、こどもの目線で伝えるニュース番組。

○(注2)「泥鰌」……池や川の泥のなかに住む、細長い魚。

○(注3)「デスク」……ニュース番組などで、記事の取材、編集を指図する人。

○(注4)「出稿」……できあがった原稿を提出すること。

○(注5)「驚天動地」……ひどくおどろかせること。

○(注6)「割愛」……省略すること。

問一 二重傍線部①～⑤のカタカナで記した語を、それぞれ漢字で書きなさい(くずさず、ていねいに書くこと)。

問二 空らん に入る内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・自分が知らなかったことを知る

イ・自分が知らないということを知る

ウ・他人が知らなかったことを知る

エ・他人が知らないということを知る

オ・他人に知られないようにして知る

問三 空らん い に適切なことばを入れて慣用句を完成させなさい。

問四 傍線部1「私は『視聴者の代表』」とありますが、「視聴者の代表」とはどういうことですか。その内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・自分が伝える必要があると考えるニュースを伝えなければならないということ。

イ・自分がおもしろいと思うニュースが視聴者にとってもおもしろいということ。

ウ・自分には視聴者にとって興味深いニュースを伝える責任があるということ。

エ・自分に理解できないニュースは視聴者には正確に伝わらないということ。

オ・自分が視聴者のなかで最もニュースからの知識を得ているということ。

問五 傍線部2「わかりやすいニュース」を筆者はどのようなものだと考えていますか。四十字以内で説明しなさい。

問六 傍線部3「『こどもニュース』の現場では、さらに衝撃を受けました。」とありますが、その理由を六十字以内で説明しなさい。

問七 筆者は「わかりやすく伝える」ためにはどのようなことが必要だと考えていますか。本文全体の内容をよく考えて、百字以内でまとめなさい。

国語

二

次のあらすじと、それに続く文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【これまでのあらすじ】

中学生の「僕」は、母から列車の寝台券を買いに行くように言いつけられた。「僕」はそれを面倒くさく思いながらも、仕方なく雨の降る中、駅に向かって出かけた。

寝台券は国鉄のS駅へ行かなければ売っていない。家からそこへ行くには私鉄の電車で乗り換えなければならないのがやっかいだった。

S駅のキップ売り場のまわりには、いつ行ってみても大ぜいの人何となくボンヤリと立っている。そのくせ、ちっともにぎやかな感じはせず、かえって混雑していればいるほど逆に陰気で、ものさびしい。おまけに僕は、駅ではたらいでいる連中が何となく好きになれなかった。改札口のキップ切りでも、私鉄の駅員と違って、ぶっきらぼうで愛想が悪い。まるで人を儀詰めのイモか何かと間違えているような態度だ。それはキップ売りの窓口でも同じことだ。僕は、電車や列車の乗車券、急行券、寝台券、定期など、いろいろのキップ売り場が並んでいるなかから、間違えないようにと思いつつ自分の目指す窓口を選んで前に立つのだが、どういわけか一度で目的が果たせたことがない。僕の買おうとするキップは、いつも必ず右隣か左隣か、あるいははるかかなたの方角の窓口へ並び直さなくては買えないことになっている。それはいいとしても、窓の向こう側にすわっている駅員が、聞きとりにくいぐもり声で、何かぶつぶつ言いながら、アゴをしゃくって人を追い払うような手ぶりをするのが、やり切れない。

彼らにしてみれば、どの窓口で何を売っているのかはわかりきったことなのだろうが、こちらはキップ買いの専門家じゃないのだから、マゴつくのがあたりまえだ。僕は、(1) 一番すみっこの窓口へ行って、教えられた列車の寝台券を申し入れた。

「……………」

そろばんをはじいていた駅員は、窓口の鉄格子越しに僕の顔を見返した。僕は、もう一度、同じことを言った。

「なんまい」

と駅員は言った。僕は一瞬ためらった。寝台券を一枚しか買わないということが、非常に愚かな、貧乏くさいことのようにも思われた。

「一枚だけでいいんですが」そう答えたあとで、僕は(2)、つけくわえた。

「下、下の段のやつができたらしいんですが、なければ上でもかまいません」

聞かえているのか、いないのか、駅員は顔を横に向けたまま、古びた手あかだらけの棚からノートを出して何か書きこみ、それからおもむろに青いキップに判を押したり、数字を書き入れたりして、

「…円…十銭」

と、僕の出した金と引きかえに寝台券をよこした。やれやれ、と僕は珍しく一度で用が片づいてたことに、ひとまず(3)して、受け取った寝台券をたもとにしまいながら、すぐまたそれが、ちゃんとしたものの中におさまっているかどうか気になった。その瞬間、僕は(4)した。やわらかいもとを探った手で、固いボール紙の感触があつて寝台券のあることはたしかめられたが、窓口の台の上に、さっき僕が出した五円紙幣がまた載っていたからだ。いや、それはさっき出した札とは違う、たしかに別の五円札だ。

駅員の頭の真上のあたりに、長いコードがつるされた電灯が緑色の笠をかぶってブラ下がっていた。しかし、石の台の上に置かれた五円札は、あきらかに僕が家を出るとき母から渡されたものとは同じでない。駅員は、その紙幣の上に何枚かの五十銭銀貨や十銭五銭の白銅貨を、もの慣れた手つきで重ねていた。

ちゃりん、と最後の銅貨が石の台に当たってたてた音が、僕の胸の底まで刺すようにひびいた。僕は心臓の血が全部いっぺんに頭の中にこみ上げてくる気がした。そして台の上の金を手の中に握りしめるが早いか、大急ぎで窓口をはなれた。——しめた、駅員のやつ、つり銭を間違えやがった。

僕は、ほとんど夢中で駅前の人混みの間をすりぬけた。

自分の手の中に、自分の使っている五円札がある——。あらためて僕が、そんなことをハッキリと考えられるようになったのは、もう高架線のガードが完全に町の建物のかげに隠れて見えなくなっただけからだ。それまでの間、僕はただ駅員がつり銭の間違いに気がつき、追い駆けてくることだけを惧れた。しかし、もうここまで来れば、その心配はなかった。曲がり角の店で、赤いトンガリ帽を

国語

かぶった甘栗屋の人形が、電気仕掛けで首を振りながら、それと一緒に手に持った鈴を鳴らしていた。

——思いがけないことって、あるものだな。駅員は僕の出した紙幣を十円札だと思いこんだ。それで五円のつりに七円何十銭かをよこしてしまった。僕は窓口の石の台の上に、五十銭、十銭、五銭の銀貨、白銅貨が投げ出すように置かれていった有様を、もう一度思い浮かべて愉しんだ。僕の想像の中で、次から次へ投げ出された貨幣が山になって、無限に高く積み上げられてゆくように思われた。しかも、その銀貨、白銅貨の山は、どれほど高くなっても、まだそのかたわらに手つかずのままに置かれた五円紙幣には及ぶがたい。こいつは僕が完全に自由に使える金だからだ。

ちゃりん、ちゃりん……。

甘栗屋の人形の鈴の音は遠くなった。だがもちろん、僕はこの五円で甘栗を買おうなんて気にはなれない。どうせ安い物をするなら、ウォーターマンの万年筆か、ゾリンゲンの鹿の角の柄のついたナイフでも買った方がいい。しかし、今さら僕はそんなものほしくはなかった。(中略)

とにかく、こん晩はこれで帰ることにしよう。金の使いみちはあとでユックリ考えたらいい。僕は、心ゆたかにそう思い、私鉄の駅の階段をのぼった。ちょうど電車が出たばかりで、ホームは空いていた。ベンチにねんねこで赤ん坊をおぶった女の人がひとりですわっていたが、そのかたわらへ行って腰掛けようとする、竹箒とチリ取りを持った駅員がやって来たので、僕はベンチから遠のいた。駅員は制服が不恰好に大きすぎ、ダブダブの襟から細い頸がのぞいていた。年齢は僕より下らしかった……。そのとき、どうしたとか僕の目の前に急に、さっきのS駅の窓口にあった駅員の顔が浮かんできた。ぶっきらぼうだった横顔の頬あたりの黄色い肌の色が、何だかひどく疲れ切った感じで憶い出され、ふとあの駅員が家に帰ると、病気の母親が待っているように思われた。駅員は、ダイダイ色の薄暗い電灯に、母親がわきの下にはさんだ体温計をかざして見るだろう。いくら注意して眺めなおしても体温計は昨晚と同じ目盛りを指しており、破れた蒲団に熱臭いにおいがこもっているのをかきながら、「ああ、おれも疲れた」とつぶやく……。僕は、そんなことをほんの瞬間の間に空想した。そして、いったん入った私鉄の改札口を出ると、² まっすぐS駅の方へ向かった。S駅のキップ売り場のまわりに、人影はまばらになっていた。僕は窓口に近いながら、さっきの駅員がまだ同じ所にすわっているのを見て、陰気な鉄格子からのぞきこむと、まだそこに彼はいた。僕は、さっき五円札を出して買った寝台券のつり銭に五円札が入っていたことを話し、ただしそれは売り場をはなれてしばらくたってから気がついたことにして、

「これ、おかえします」

と、紙幣を窓口にし出した。

最初、駅員は何のことかわからなかったらしく、げんそうに僕を見返していたが、やがて、「あれ、そうでしたか？」と、自分のあやまちに気がつく、たちまち恥ずかしそうに、それでいて愉快そうな笑顔を顔一面に浮かべながら、「や、どうもすみません、わざわざ……」と、礼を言って五円札を受け取り、紙幣をピンとのばして指先で弾いたついでに、その指で自分のおでこも軽く叩いて、

「陽気のかげんか、ここんところ、おれもどうもイケねえや。ほんとに、すみませんでした」

と、もう一度、僕にお辞儀をした。——思いがけないといえば、こういう僕の気持ちこそ本当に思いがけないことだったのかもしれない。そんなに礼を言われて、はじめは逃げ出したい気持ちばかりだったが、S駅のキップ売り場をはなれて、また私鉄の駅の階段を上るころから気分が落ち着いてきたせい、か、頭の中がスッキリとして、すがすがしい気持ちになってきた。いつの間にか雨はあがり、僕はホームの真ん中より先の方へ出て、夜空を仰ぎながら胸いっぱい空気を吸いこんだ。肺の中で一つ、

「カーン」

と、澄んだ鐘の音が聞えるような感じだった。³ 僕は心の底から湧いてくるよるこびに満足した。電車が走り出して、目の下に家々の小さな灯がマタタいてるのを見ても、この満足感は新しい形で、よみがえった。

ああ、よかったな——。

僕は何よりも、窓口の鉄格子の向こう側にすわっていた駅員の横顔が、こちを振りかえって笑ったとたんに、ひとりの普通の青年の顔になって感じられたことが、意外でもあったし、うれしい気もした。

このよるこびはむろん、家へ帰りついても消えずに続いた。

「ただいま」

玄関の戸をいきおいよく開けると、僕はタタキに立ったまま、出迎えた母に寝台券とつり銭を渡しながら、こん晩の出来事(注)のてんまつを話して聞かせた。

「いやあ、そのときの駅員の顔つきったら、なかったよ。こっちもテレ臭かったけれど、向こうはそれ以上にすっかりテレで、逆上

国語

しながらよろこんでやがんのサ」

だが、母は僕の話に一向、何の感動もあらわなかった。のみならず、僕の渡したつり銭と僕の顔とを不思議そうに何度も見較べたあげく、とうとう、

「馬鹿だねえ、おまえは——」と世にも腹立たしげな声で言った。「さっきおまえに渡したのは、あれは①なんだよ」

僕は、目のまえて灯が消え、急にあたりが真っ暗くなる気がした。

あれから、もう三十年近くたつ。あのころから見るとS駅のまわりも、僕自身もすっかり変わった。あのころはまだS駅の近くには八階建てのデパートが一軒たっているのが珍しかったぐらいで、田舎のにおいのする郊外電車との接続駅にすぎなかったが、いまは林立した高層ビルが駅のまわりを幾重にもとり囲み、キップ売り場の前の広場のあたりに、地下道が張りめぐらされて、冷たいヘンな臭いのする商店街になっている。そして僕自身は白髪まじりのおやじになった。けれども僕の中身はどう変わったか、変わらなかった、自分ではさっぱりわからない。

あんなことがあってからも、たびたび僕はあれと同じようなトンマな失敗を繰り返しながら、今日まできた。あのころでも僕は、決して純な正直な心持ちであつたわけではなく、結構ズルくて、意地汚く、そのくせ時どきヘンな空想癖を發揮して、常識では考えられないマヌケなことを仕出かす少年だった。それはいまでも変わらないように思う。しかし、この空想癖がなかったとしたら、僕はいまより一層どうしようもなくとりえのない人間になっていたかもしれない。あの晩、返す必要もなかったつりの五円札を、夜遅くS駅まで取りにやられたときの具合の悪さと、ナサけない気持ちとを、昨日のことのように憶い出しながら、そう思う。あれ以後、あのS駅の窓口の駅員とは一度も会っていないが、あのときの彼の笑顔はまだ忘れられない。そして、あの笑顔を見ることの幸福は、五円札では買えないものだと考えて、僕は自分で自分を慰めてみることにしている。

(安岡章太郎『幸福』による)

- (注1)「国鉄」……………日本国有鉄道の略。現在はJR(ジェイアール)として運行営業している。
- (注2)「…円…十銭」……………ここは、昭和十年代に通用していたお金の単位のこと。なお、一円は百銭。
- (注3)「たもと」……………着物のそでのふくろのようになった部分。
- (注4)「ウォーターマン」……………万年筆の製造会社の名。
- (注5)「ゾリンゲン」……………刃物工業で有名なドイツの都市の名。
- (注6)「ねんねこ」……………赤ん坊を背負ったとき、その上から着る着物。
- (注7)「タタキ」……………土をたたいて固めた土間。
- (注8)「てんまつ」……………最初から最後までのでくわしい事情。

問一 本文中の() 1～4に当てはまる最もふさわしい言葉を、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア・ホット イ・ドキリと ウ・あわてて エ・おそろおそろ

問二 本文中の①に当てはまる最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア・一円札 イ・二円札 ウ・五円札 エ・十円札

問三 傍線部1「僕は心臓の血が全部いっぺんに頭の中にこみ上げてくる気がした。」とありますが、ここにおける「僕」の気持ちの説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア・つり銭を用意する駅員のあまりにも偉そうな態度に我慢ができず怒りをおさえきれないでいる。

イ・寝台券を買う時に細かい注文をつけたことで駅員に文句を言われるのではないかと恐れている。

ウ・駅員が切符の代金の計算を間違えたことに気づかずにつり銭を渡すことを期待し興奮している。

エ・つり銭の硬貨を乱暴にあつかう駅員の態度に対する不満を表情に出さないようにこらえている。

オ・石の台に置かれた硬貨が響かせる澄みきった音に美しく軽快な調子を感じて心が高ぶっている。

国語

問四 傍線部2「まっすぐS駅の方へ向かった。」とありますが、「僕」がそうしたのはなぜですか。その理由の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・さっきの国鉄駅員のぶっきらぼうな態度を見たことで、まだそのままで窓口にいるかどうかもう一度見たかったから。
イ・さっきの国鉄駅員の貧しい家庭の様子を知ったことで、一時的ではあっても悪い心を起こしたことを後悔したから。
ウ・さっきの国鉄駅員からつり銭をだまし取ったことで、それが明るみに出たら大変なことになってしまうと感じたから。
エ・さっきの国鉄駅員がつり銭を間違えたことで、それを返しに行った正直な行いを母にほめてもらおうと考えたから。
オ・さっきの国鉄駅員の日常生活を想像したことで、余分なつり銭はごまかさずに返しに行くほうが良いと思ったから。

問五 傍線部3「僕は心の底から湧いてくるよるこびに満足した。」とありますが、ここにおける「僕」の気持ちを八十字以内でわかりやすく説明しなさい。なお、解答に当たっては、「僕」のこの満足感は、思いがけないつり銭を手に入れてその使い道を想像した時の喜びとは異なることに注意しなさい。

問六 傍線部4「母は僕の話に向、何の感動もあらわさなかった。」とありますが、それはなぜですか。その理由の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・国鉄の駅員がつり銭を勘違いして恥ずかしがる態度について語る「僕」の話には何の興味もなかったから。
イ・渡されたお金がいくらか確かめもせずつり銭を返しに行った時の話をする「僕」の愚かさにあきれたから。
ウ・母に切符を買ってきたことをほめてもらおうとして作り話をする「僕」のことが情けなくなったから。
エ・切符を買いに行くだけなのに帰りが遅くなったいいわけをする「僕」のことを腹立たしく感じたから。
オ・うまい言葉で母をだましてつり銭を自分のものにしようとする「僕」のことを末恐ろしく思ったから。

問七 傍線部5「僕は、目のまえで灯が消え、急にあたりが真っ暗くなる気がした。」とありますが、ここにおける「僕」の気持ちを百二十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 空想癖を持つ「僕」についての説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア・空想癖は、「僕」をたびたびマヌケな失敗をしかせてしまうだらしない人間にした。
イ・空想癖は、「僕」を叱られてばかりいる自分が自分でもいやになってしまう人間にした。
ウ・空想癖は、「僕」を他人の失敗につけ込んでお金をもうけようとするずる賢い人間にした。
エ・空想癖は、「僕」を現実の出来事を想像世界と結びつけることで喜びを感じる人間にした。
オ・空想癖は、「僕」を自分の頭の中で思い描いた世界だけに生きることを楽しむ人間にした。

